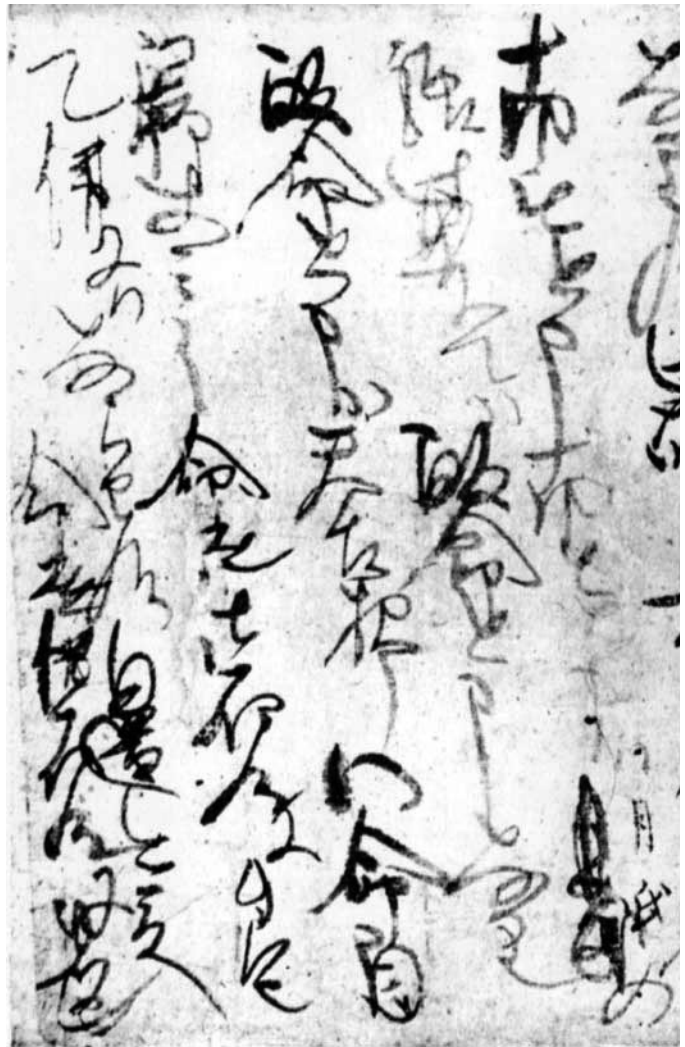




今月の御聖訓



【南無と申。】南無と申スは月氏の

語、此ノ土にては帰命と申スなり。

帰命と申スは天台釈シテ云ク「命を以て自ら

帰す」等云云。命を法華經にまいらせ

て仏にはならせ給フ。日蓮今度

命を法華經にまいらせて（後欠）

【南無御書 全集一二九九頁】

目 次

今月の御聖訓

卷頭言	菅野憲道	1
お講話「竜口法難と生命観」	菅野憲道	2
御書と日興上人〔166〕	松田銘道	8
【採過拾新録】「大石寺目薬と清野氏〔十三〕」		10
【寄稿】「大聖人様の聖跡を尋ねて(安房へ)」	井元恵子	14
恵日だより		20
十一の行事 霜月詠草 恵日俳壇		



信仰の寸心

菅野 憲道



令和二年一月の役員研修会で、現代社会の趨勢について、政治、経済、環境問題や新型ウイルスのパンデミック等に触れて困難な時代に鳴りつつあることを説明した。とりわけG A F A（ガファ）というIT関係の巨大企業が世界の経済・流通・文化を大きく変えつつあり、日本企業の低迷にも触れたが、その後も世界情勢は日本も巻きこんで急激に変化しつつあり、お会式の時機を迎えても不透明な状況は少しも変わっていない。

お会式と云えば、宗祖大聖人の御命日法要に「立正安国論」をはじめ歴代の国諫状を奉読し、正法流布の精神を継承する儀式である。ところが、明治以降の日本が国家主義に収斂されていく中で、「立正安国論」も誤解され、政治思想として利用される。その流れで幾つかの政党まで生まれて、今に尾を引いている。

政治形態や社会構造は今後も大きく変貌を遂げていくだろう。まさか鎌倉時代の政治・社会を背景に説かれた提言を一文一句残らず金科玉条として振り回す人はいないだろうが、文義意の何を読み取るかによつては時代錯誤の非難をまぬがれない。

「立正安国論」は「汝早く信仰の寸心を改めて速やかに実乗の一善に帰せよ。然れば則ち三界は皆仏国なり」とあつて為政者が法華経の精神によつて政事を行うよう諫言したものである。いくら立派な制度や政策をつくってみても、運用するのは人だし、その人が規則を悪用することは珍しいことではない、やはり人の心のありようこそが政治の要諦になってくる。

戒壇といつても基本は信仰の寸心に収まる。戒とは防非止悪といつて、心の中にあつて自分を律するもの。したがって事壇といつても、戒壇堂等の建築物や土壇等の構造物ばかりを指すのではなく、行者己心中の戒法、戒体が中心である。全く余所外に求めるものではない。広宣流布とは、法を弘めるのであつて教団の覇権争いではないはずだ。G A F Aが世界を変えるような時代でも、法華経の慈悲の精神が流布するよう努めたいものだ。

お講師講話（要旨）

拝読御書

「種種御振舞御書」（全集九一一頁）

竜口法難と生命観

菅野 憲道

《竜口法難と宗祖の御心境》

九月十二日の夕暮れから、翌十三日の未明にかけて事件は起こったのでした。表向きは遠島・流罪の罪名を着せられたのですが、実際には権力づくで闇に紛れて謀殺してしまおうというもの、異常な数の兵士に護送された大聖人は刑場・竜口たつのくちの頸切りの場に座らされたのです。ところが光物の出現という怪異現象によって中断され、危うく虎口を脱したのが、いわゆる竜口法難です。

竜口の地は鎌倉の郊外、江ノ島に近い境界外で、当時鎌倉幕府の処刑場として知られ、多くの謀反人が処刑された所です。建治元年には蒙古の使者として来朝した杜世忠一行もここで斬首されております。

大聖人の竜口法難については、いろいろな見方があって、明治になって西洋の実証史学が入ってきた時、歴史学者は、竜口

法難はあまりにドラマチックで芝居がかった出来事でしたから、実際にはなかったのではないかというような史論を発表し、それで論争が巻き起こったのですが、その後、古天文学者などの研究で、その時期にちょうど流星群が出現していたことが証明され、科学的にも否定出来なくなったのです。

しかし、何と言っても大聖人が伊豆流罪や安房の小松原、また鎌倉松葉ヶ谷など、幾度も身命にも及ぶような法難に遇われながら、少しも懲りることなく、法華経弘通の信念を貫かれた、その信念というか、そのご意志の強さは想像をこえるもので、その意味で竜口法難における大聖人のお心は、現代人にはなかなか理解できないものがあると思うのです。しかも、諸御書には、この時の御心境を次のように述べられております。

＊（土木殿御返事）「これには一定と本よりござして候へばなげかず候。いままで頸の切れぬこそ本意なく候へ。」とあって、法華経のゆえに命を捨てることは本望であること。

* (佐渡御勘気抄) 「いたづらに朽ちん身を、法華經の御故に捨てまいらせん事、あに石に金をかふるにあらずや。」無為

徒食に終わりがねない人生を法華經のために捧げることは石を金に替えるような幸いであること。

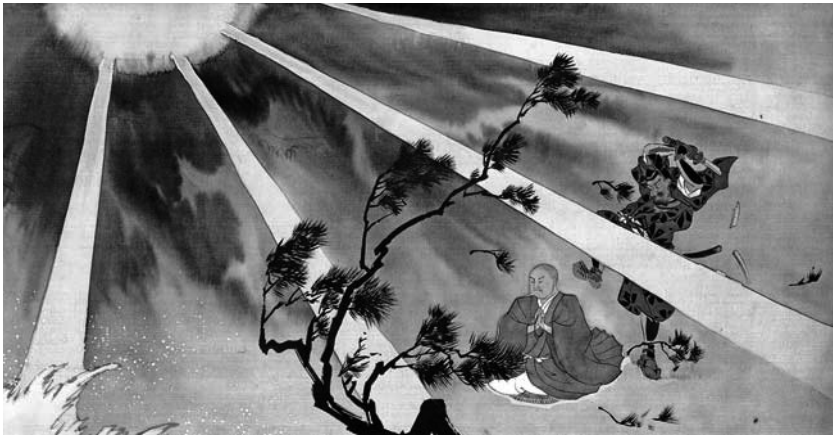
* (種種御振舞抄) 「これほどの悦びをばわらへかし」法華經のゆえに身命を失うほどの慶事はない。これを喜びなさい。

以上三編ほど例示しましたが、同様の御書は数多く見られ、普通人には理解も及びがたい信念の一端を表しておられます。

《現代人の生命観》

というのは、全般的に戦後見失われた精神的価値はいろいろありますが……、たとえば忠・孝などもそうですが、殉教とか殉職などの見方もそうです。

かつて日本人は軍国主義下で、非常時を名分に国民総動員して、個人の自由はおろか生命と財産までも召し上げ、亡国の道を突き進みましたから、その反省、反動の上から、個人の自由と私権を最大限に認める社会が形成されてきたと思うのです。



竜口法難 (『日蓮大聖人御一代絵図』) より

今でもコロナ禍を巡って公益と私権の制限は大きな問題となっておりませんが、公権の権力強化には強い懸念がある一方、社会環境としてはエゴイズムの蔓延、格差や

分断、孤立化の問題が生じてきております。

私権優先の社会ですから自己犠牲などと言うことは否定され、警察官や消防士や自衛官なども生命の危機に曝される事態に直面すれば、さっさと退職してしまっても問題は無いわけです。

福島原発事故で、国難というべき危機的な状況を迎える中で関係者が決死の覚悟で作業に当たりましたが、一方で真つ先に避難した責任ある立場の上級国民も多数いたようです。

こうした問題はその背景に現代人の生命観や人生観があることはいまでもありません。

それは端的にいえば、生命尊重を第一とするか、生命より大切なものがあるとするかの違いに帰結するかと思います。

生命尊重といった場合、現代の生命観からいうと、だいたいの物質的な、あるいは身体的、肉体的、生物的生命観で、この身体が命であるという見方です。

しかし身体はそれぞれに自己完結的に孤立して存在するものだから、他者との関係性もない。また生命を物質と捉えれば、形あるものは滅つせざるを得ず、無常を免れない。このような生命観から孤立と虚無という不安が生ずることになります。

また、物質的生命観では脳、心臓、五根などの作用こそが生命と考えられ、肉体的欲求を満たすことこそが全てであるような欲望至上主義におちいりかねません。しかも自己の六根から一切をみるならば、外界の対象のみを追い求め、本源的自己に迷い見失ってしまいます。

《もう一つの生命観》

それに対して、宗教は人間存在について全体的本質的な意味での生命観です。

とりわけ仏教では、いのちとは何かと問われた場合。五蘊十二入とか、十二因縁、あるいは色心不二や一念三千論で示されたように、人の一生には受精卵だった時代もあり、その時点ですでに遠い過去からの因縁によって生かされていること。

また生命は「識の連持」といつて瞬間々々の識が連続し、常にダイナミックな変動の中にあること（流動平衡）。

次に他者との関わりにおいて、人種や人類という生命の流れの中に受けた命である以上、

*《法蓮抄》「六道四生の一切衆生は皆父母なり。」

と仰せられるように、一切衆生が我が身に親しき父母兄弟であ

るという生命観なのです。したがって生命の本質から行けば一切衆生が互いに助け合って共存していくのが理にかなっていることになります。

以前から、一念三千の法門について、大聖人は妙樂の釈、すなわち、「当に知るべし、身土は一念の三千なり。故に成道の時、此の本理に称ひて一身一念法界に遍し」の文を引用されていることを紹介してきましたが、これは大聖人の生命観の一端を表されたもので、その具現化として十界互具の曼荼羅本尊が表されたのでした。また大聖人の魂魄が永遠なることを、

*（報恩抄）「日蓮が慈悲曠大ならば南無妙法蓮華経は万年の外未来までもながるべし。」

と記されて、法華経の行者たる日蓮大聖人の己心中には妙法蓮華経の法界全体が、また過去久遠劫来、未来永劫に常住し、衆生を照らすことを表明しておられたのです。

《無為徒食の人生といのちの土台》

生命といっても精神的な面と物質的な面の両方があつて、それらが現代ではどちらかというと物質的、いわゆる生物的な生命観の方が強くて、精神的な生命観の方が忘れられているように思うのです。

「佐渡御書」の中に、

「牛馬猶身を惜しむ、況や人身をや。癩人猶命を惜しむ、何に況や壯人をや。……魚は命を惜しむ故に池にすむに、池の

浅き事を敷きて池の底に穴をほりてすむ。しかれども糸(餌)にばかされて釣(つりばり)をのむ。」(全集九五六頁)

と。すなわち誰もが命が惜しい。命は一身第一の宝、かけがいの無い宝です。誰でもわかつているつもりなのですが、実際には命が惜しい故に命を粗末にしてしまうことがたくさんあるのです。

自分の命が惜しいという思いから自分を甘やかし、特別扱いし、わがままな貪欲も起こって無為徒食の人生を送ることになってしまう。自我偈には「放逸著五欲墮於惡道中」とあるように、欲が出て騙したり騙されたりしているうちにすっかり三惡道の人生になってしまう。生きていることがそのものが苦しみであったり、無意味なものに見える時は要注意です。

人は何か一つ心に決めたことがないと、縁に流されだんだん何をしているか分からなくなってしまうのです。善惡の判断も分からなくなってしまうのです。生命觀や人生觀はその物差しです。しかしこれが間違っているても教えてくれる人もいないから気づかない。

今の世の中は、例えば「人の命は地球より重い」という言葉がありますが、実際は至る所で命が粗末にされ、至る所で無駄に使われているのです。あるいは却ってその命あるゆえに邪な



魚は命を惜しめども…

行いをして大きな罪を作ることがたくさんあるのです。

思うに人生觀や生命觀について基準になるのがこの信仰なのです。一念三千觀で示された生命觀、世界觀こそが円満にして偏りの無い根源のいのちをしめしているのです。所詮、この土台がなければ、自分自身では我が命を生かしているかどうかも

分からないのです。却って粗末にしていることが多いのが実情ではないでしょうか。

《生命を生かす方法》

このいのちの土台をつくるためには法華經に帰依することが要請されます。帰依とは南無ということ、南無御書」には、

「帰命と申すは天台釈して云く「命を以て自ら帰す」等云云。命を法華經にまいらせて仏にはならせ給ふ。日蓮今度命を法華經にまいらせて」(全集一二九九頁)

と書かれています。

これは、大聖人の一番基本的な姿勢であつて、自分の自我とか感情といったものを、すべて妙法蓮華經に任せ、自分を帰命するということです。そのことから妙法蓮華經によって自分の生き方を決して行くことが、最も命を生かす方法であつて、

「沙に金をかへ、石に珠をあきなへるがごとし」(全集九一

二頁)

と、あたかも塵芥のような我見を菩提心、仏心に変えることになると表現されているのです。

放っておいたら愚かな生き方しかできないものを、正しい教えを持つことによって、仏心に変えることができるのですが、そこには不惜身命ということが要件になります。つまり片方では命は大切な惜しむものといながら、一方では命を惜しむなと捉えているわけで、矛盾しているようにもみえますが、これは矛盾ではないのです。

社会生活の中で、仕事とか財産とか、あるいはまた健康とかいろいろな大事なことがあります。やはり健康で長生きすることは一番の財だというのは世間普通の話です。が、では健康で長生きして何があるのかというと、健康で長生きしても悪いことを散々して世の中に大きな災いを残して死んでいく人もいますし、またつまらないことで人と争って、一生を台無しにしてしまふ人もいます。世の中には、生まれてこないほうが良かったという人生もあるのです。

ですから、必ず精神的な生命、信仰とか哲学とか、あるいは人生観といったものにおいて、本当に正しい指針、最上の法を持たなければ、ただただ健康で長生きしただけでは、返って災いを招くことになりかねないのです。

そのところを仏教では、いわゆる十界論として、地獄・餓鬼・畜生・修羅をめざす人生ではなくて、仏道をめざさなければ

ならないというのです。

ですから、本当に命を生かすことは、結局自分の命の有様を、正しい教えによって変えなければできないのです。そして、そのことができた時に、いわゆる寿命無量という寿命品の教えが生きてくるのです。

要するに、正しい教えを持って、自分の一生を修行として捉えていった時に、そこに多少なりとも人間的に向上が見られるのです。そして、その中から、我われが知らず知らずの間に、自分の身のみならず周りの人々をも照らすような精神的な命が確立されていくに違いないのです。

我われは今こうして法華経・日蓮大聖人を本師と仰いで信仰している。歴史的事実として大聖人は鎌倉時代の弘安五年に六十一歳をもって入滅なされた。亡くなられたけれども現に人々の心の中に生きて常に見守り導いて下さっているというのが、法華経の生命観なのです。

我われのしていることは、ずっと過去にいろいろな人がいろいろなことをしてきた、いいこともあれば悪いこともあるでしょうが、良いこと、要するに世のため人のため、あるいは後世の人々のためにとって、我が身を犠牲にしてもその道に尽くしてきた人たちの、その尊い遺産の上に、我われの今の生活があるのです。

仏法という精神的な生命は肉体的な生命と違って、時間と空間を超えて、無数の人々に幸いをもたらす力を持っているので

す。

ですから、生命というのは無くなってしまう物質的生命と、無くならないですと後の世になればなるほど、だんだんそれが生きて光り輝いていくような生命もあるのです。仏の命とは、そういう時間や空間を超えて直接我われに働きかけてくる仏性としての命であると説かれていたのです。

大聖人は、寿命品というお経が何故めだたいかという、寿命無量といつて、すべての人々が仏性を持っていて、その仏性は無量の永遠性を持っているとも表現されているのです。

命が大切だということは、単なる健康とか寿命、生物学的な、肉体的な寿命のみならず、色心不二ですから、深い因縁として我われに受け継がれている命があるというのが、法華経の信仰だと思うのです。

我われは、日常生活の中でマンネリの繰り返しになってきますと、感動したりものごとを感じたりする力も弱ってきますが、心のどこかに、必ず何かの深い因縁があって、この世の中に今こうして、知人や家族と一緒に生きていることを、感じ取れたら、自分の生き方も多少は変わってくる

ように思うのです。

そういう目に見えない世界のことを信ぜず、過去の因縁も全部忘れて、目に見えるものしか信じないというのであれば、後は自分の小さな我見、その時々感情や欲望に振り回されて徒らに一生をおえてしまうものです。

我われもこういう今の世の中で、心の中にしっかりとした信仰を持って、自分の生き方をもって正法というものを示していくことができれば、そこに大きな幸いの種を、世に残していくことができると思うのです。

どうか、大聖人が竜口法難に値った時に、「これほどの悦びをばわらへかし」(全集九一三頁)

と仰せられた深い心を、我われもまたしっかりと受け止めて精進して行かなければならないと思うのです。

大聖人は、命は限りのあるものですが、法のためには決して身を惜しんではいけない、世のため法のため命を燃やして生きなさいと教えられているのですから、どうかそのつもりで精進していただきたいと思います。

南無妙法蓮華経

(了)



源立寺境内の四季桜

〔御書と日興上人（一六六）〕

「立正安国論」書写と「安国論問答」（一〇〇）

松田 銘道

前回は、『法華取要抄』（文永十一年二月に構想し十一月に完成）の⑧と⑨の問答から、地涌の菩薩の出現等が末法の「我等が為」と示されたことについて見てきました。今回も引き続き⑨から要点を示していきます。⑨では、引き続き地涌の菩薩の出現等が末法の「我等が為」とあるとの文証に、

「経文に『況滅度後』『令法久住』等云云。此等の経文を以て之を案ずるに、偏に我等が為なり。随つて天台大師当世を指して云く『後の五百歳遠く妙道に沾はん』。伝教大師当世を記して云く『正像稍過ぎ已りて末法太だ近きに有り』等云云。『末法太有近』の五字は我が世は法華経流布の世に非ずと云ふ釈なり。」と、『法華経』の「況滅度後」「令法久住」の経文、天台大師の『法華文句』のご文、

伝教大師の『守護国界抄』のご文を示されています。

「況滅度後」とは、「法師品」第十のご文で、「仏の滅後に『法華経』を弘める者は多くの怨嫉を受け、大難に遇う」ことを予証したご文です。

「令法久住」とは、「宝塔品第十一」のご文で、釈尊が大衆に仏滅後の弘経を三回にわたつて勧め命じた中、第二のご文です。

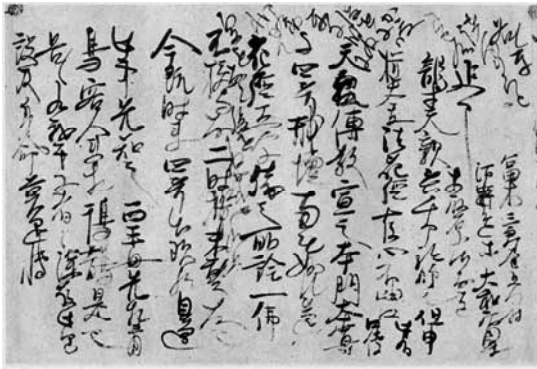
以上の経文が「我等が為」とあるとの証明に、天台大師が『法華文句』に「仏滅後の第五の五百歳までも法華経の教えは衆生に得益の恵みを与える」と、『法華経』の利益は滅後にも及ぶと釈したご文、また、伝教大師が『守護国界抄』に「仏滅後の正法千年と像法千年が過ぎ去つて、末法の世が間近にせまってきた」と、『法華経』が

流布する末法の到来を思慕したご文を示されています。

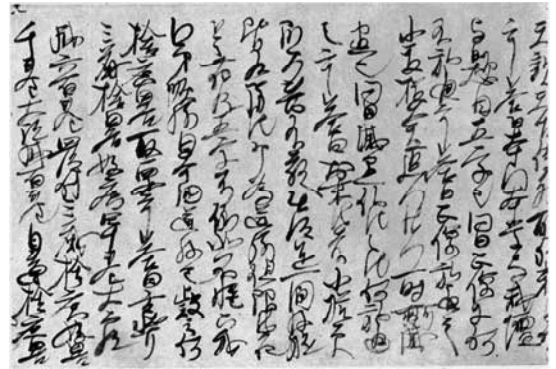
このように、⑨では「多宝の証明・十方の助舌・地涌の出現」が末法の「我等が為」との証文に、天台大師や伝教大師の釈を用いられていますが、その事例は、文永九年二月の『観心本尊抄』に、

「天台大師記して云く『後の五百歳遠く妙道に沾はん』。（中略）伝教大師云く『正像稍過ぎ已りて末法太だ近きに有り』等云云。『末法太有近』の釈は、我が時は正時に非ずと云ふ意なり。伝教大師日本にして末法の始めを記して云く『代を語れば像の終り末の初め、地を尋ぬれば唐の東、羯の西、人を原ぬれば則ち五濁の生鬪諍の時なり。経に云く、猶多怨嫉 況滅度後と。此の言良に以有るなり』。此の釈に『鬪諍之時』云云、今の自界叛逆・西海侵逼の二難を指すなり。此の時地涌千界出現して、本門の釈尊を脇士と為す一閻浮提第一の本尊、此の国に立つべし」とあります。

ここには、「地涌千界出現」について、天台大師の『法華文句』、伝教大師の『守護国界抄』のご文を用いられて



『法華行者値難事』(真蹟中山法華經寺蔵)



『法華取要抄』(真蹟中山法華經寺蔵)

追申文には、竜樹や天親、また天台、伝教には付嘱されず、また時が到来せず広めることのできなかつた本門の本尊と四菩薩・戒壇・南無妙法蓮華經の五字を、末法の今四菩薩が出現して建立するとされ、宗祖がその任に当たる、との自覚が示された。

当抄は、本門の本尊・戒壇・題目の名目が初めて示された文永11年 1月14日の『法華行者値難事』の翌月から構想され、同じく「本門本尊と戒壇と題目の五字」の三つの名目に触れられていて、両抄の関連性が窺える。

「一閻浮提第一の本尊」について、『法華取要抄』では⑩の問答にて、「如来滅後二千年に竜樹・天親・天台・伝教の残したまへる所の秘法何物ぞや」との問いを設け、それに対して、「本門の本尊と戒壇と題目の五字となり」と、
「本門の本尊と本門の戒壇と本門の題目」との三つの名目、すなわち三大秘法からその本尊の内実が示さ

います。また、伝教大師の『法華秀句』の、日本の末法の初めを予言した「五濁の生闘諍之時」のご文にも注視されています。
すなわち、『法華秀句』の「闘諍之時」は、宗祖が『立正安国論』で予証した「自界反逆（＝国内の叛乱）」と、「西海侵逼（＝蒙古による西海侵略）」の「二難」である、との見解を示されています。

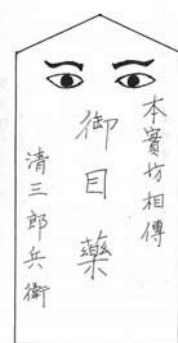
そのような闘諍を繰り広げる混沌の時の末法に、「地涌千界」が出現し、「本門の釈尊を脇士と為す一閻浮提第一の本尊」を建立する、との法義をされています。
・その理由は、仏からの付属がなく、時機も未熟である。
・今は、その時期が到来し、四菩薩が出現する。
以上のことを、宗祖は「先づ之れを知りぬ」との確信を示されています。
この三つの名目の法義については、『法華行者値難事』の翌月から構想された『法華取要抄』でも再び説示されていて、この時期、宗祖が集中して思索されたことが知れます。

れています。この三つの名目については、佐渡での最後の書となる文永十一月一日の『法華行者値難事』に、
「天台・伝教は之れを宣べて、本門の本尊と四菩薩・戒壇・南無妙法蓮華經の五字と、之れを残したまふ。所詮一には仏授与したまはざるが故に、一には時機未熟の故なり。今既に時来たれり、四菩薩出現したまはんか。日蓮此の事先づ之れを知りぬ。」と示されています。ここには、
・天台・伝教の両大師が法華經の教えを説いたが、本門の本尊と四菩薩と戒壇と南無妙法蓮華經の五字七字は、説き残された。
・その理由は、仏からの付属がなく、時機も未熟である。
・今は、その時期が到来し、四菩薩が出現する。

法華講衆外伝

大石寺目薬と清野氏〔十三〕

菅野 憲道



(12) 清野勇の逸話と終焉

○大阪の下水道は明治二五年に長与専斎が大阪私立衛生会にて下水道整備の急務なることの講演が有り、折から赤痢などの流行もあつて、同会の会頭に山田信道大阪府知事、副会頭に大阪医学校病院長の清野勇が選出され、下水道敷設の議決をしたことが始まり。(「近代下水道の源流」山本正直)

○清野勇は名聞にこだわらない率直な人柄で知られていた。ある時、患者を誤診して容体危篤に陥ることがあつた。勇は首をかしげて更に診察を累ねたすえに、忽然とひらめくところがあり、「吾誤てり」と告げた。即日薬を代えて治療を施した結果、未だ幾日ならずしてめでたく平癒することができた。元氣になつた患者がその後、戯れに問いかけたことがある。「先生が名医で腕が良いことは認める。しかし先に誤診したことはどうな

んですか」と。勇、笑つて云うに「誤診は医師の常です。天下数千の医師の中で誤診したことのない人はほとんどいないでしょう。ただもし最初に誤診しても、中途にしておかしいと思つたら翻然とこれを了得し、直ちに適宜の治療を施すことが大切なのです」と応えた。(「当世名士譚」吉弘白眼著)

○先生は学者としては自任されていなかったが、臨床医としての自信は極めて強かつた。それもそのはずで、先生の診断的眼識の透徹していたことは実に神に入つていた。先生の診断された病名と病理解剖の結果とは殆どいつも合致していたからである。①

○平素は厳格な先生であつたが、宴会などで酒に酔われるとすっかりくだけてジョークが続出し、周囲の人を笑いの渦に巻きこんで、まるで別人のようであつた。座談も仲々お上手であつた。酔われた先生の口から、いろ／＼の珍聞奇談を聞かされ

たこともある……。②

○ 先生の嫡男は新進有為の病理学者として世界的業績を挙げ、京大に重きをなせる謙次博士である。先生の家には巨萬の財産があり、相続者には謙次博士の如き学界の麒麟児があり、婿には関西外科界の重鎮たる高安道成博士が控へている。実に羨ましい祝福の家門である。その上に古稀の齢を超ゆること五つにして靜かに瞑目されたのであるから、先生には微塵も思い残されたことは無かつたであらう。こゝに在りし世の先生のおも影の一斑を記して永久の記念とする。③

○ 清野謙次は大正五年京大病理学教室の助教授に昇進したが、その上席には、藤浪鑑、速水猛の両教授が頑張つていて、教授のポストが空くことは十四、五年は望めず、万年助教授のめぐり遇わせとなつていた。この不遇に同情した荒木博士が彼を東北大学の教授に世話しようとし、謙次も心が動かされた。が父清野勇に相談すると、「お前は教授になりたいのか研究したいのか？。研究したいって。それで研究には京都と仙台とどっちがいいのか？。ウム京都がよい、それなら京都におれ、食うことや研究費の心配はさせんから」と釘を差した。



左から清野勇、清野謙次（京都大学学生時代）、清野泰

それで彼も半永久的助教授に甘んじていたところが、大正九年に微生物の松下博士が大学を飛び出して代議士になった、その後釜へ彼が病理から鞍替えしてめでたく教授になった。それから

大正十二年には速水博士が急逝したので彼は病理学教室に再転して十四年間教授職にあつた。④

○ 清野勇は医学校時代から各種の災害義援金、学校寄付金などたびたび寄付行為があり、多くの感謝状が残っている。

⑤ 開業医時代になつて巨財を成した清野勇だが、その資産は京都田中町の自宅約千坪（山林）、株・預貯金四、五十万円（推定）が長男謙次に相続された。⑥

かくして大正十五年十一月一日午前七時廿五分逝去された。享年七十六歳「葬儀は翁生前の希望により、去三日午後二時より三時まで自邸に於いて告別式を営まれたりと」（「医海時報」一六八三号）

法号は堀日亨上人から「慧光院照量詮 寿日勇居士」と諡され、大石寺墓苑の累代之墓に葬られた。

(14) 知の巨人・清野謙次

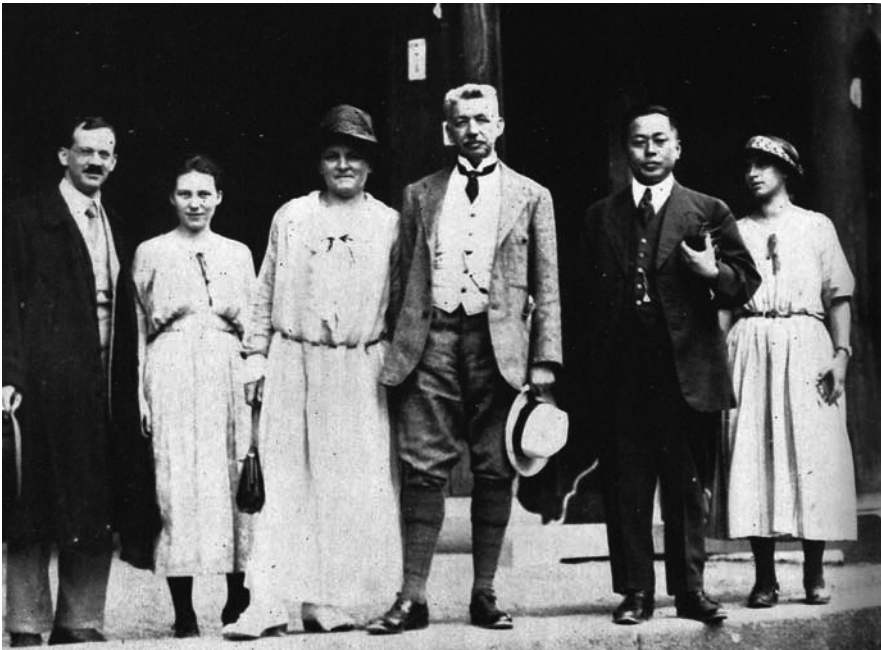
清野謙次は昭和十三年に古寺の聖教類窃盗という不名誉な事

件を起こしたため、その事が災いして今でも正当な評価を得られていない。しかし病理学・人類学・考古学・民俗学等の広汎にわたる研究の足跡を見れば、その業績の多大なること、人脈の多様なことに驚かされる。いまはその一部だけだが、大石寺目薬の家系の掉尾を飾る子孫たちの活躍ぶりを紹介したい。

清野謙次は、当時岡山県立医学校長の職にあつた清野勇の長男として明治十八年八月十四日に誕生した。後に父の大阪府立医学校長への転任により父母、姉二人弟一人、計六人の家族で大阪に移転している。

その後は北野中学、第六高等学校を経て京都帝大医学部へ進む。謙次自身は祖父一学の影響もあつて少年期から考古趣味をもっており、休みといえど兄弟や友人を誘つて泉州の遺蹟等を発掘にでかけるほどだった。大学もその方面に進みたかつたらしいが、父の意向によつて、本業医学、

趣味考古学という選択を



左からグレッフ、同夫人、アショッフ夫人、アショッフ教授、清野教授

明治四十二年京都帝大医学部を成績優秀で卒業、当時京大の三秀才と称されほどで恩賜の銀時計を授かつて、同大学医学部助手として藤浪鑑教授の病理学教室に入る。

その後研究論文が認められ、明治四五年には文部省留学生として渡独、フライブルク大学アショッフ教授のもとで生体染色の研究に取り組み、大正三年にはドイツで『生体カルミン染色』（ビターレカルミンスパイヘルング）を出版し、世界の病理学者の仲間入りをしている。ドイツでの生活も恵まれたもので「私としては、毎月三百五十円、文部省の規定通りの留学費を貰う。これはドイツ助手からみても十分にぜいたくな費用であつたが、それだけでは足りずに、絶えず日本の親父に無心して送金して貰ったから、日本留学生としてもかなり暮らしがよい方であつ

た」と述懐している。（「随筆遺稿」）

しかし間もなく第一次世界大戦が勃発したため、同年に急遽

帰国し、十二月には安場富美子と結婚している。

富美子の語るところによれば、清野謙次の長姉進子（シン）は、実業家福島行信に嫁いでいたが、何くれとなく清野の兄弟姉妹のことを気にかけていた。そんなとき婦人画報に安場末喜の四女、富美子の写真が掲載されることがあり、安場家の長女和気子の夫富永敏磨（後に日本郵船副社長）と福島行信が三高同級以来の親友であったため、福島進子が話をもっていつて留学中にはまとまっていた。また、「表面の仲人には俺がしてやろうとの事で、後藤新平叔父夫妻によつてなされたのだつた。」（「偲ぶ草」 福島行信）

（富美子の祖父・安場保和は明治政府の重鎮で各県令や北海道庁長官、貴族院議員などを勤めている。その娘婿・後藤新平は富美子にとっては叔母の夫にあたり、鶴見俊輔はその娘の夫という関係になる。）^⑦

謙次・富美子の結婚式については田健治郎（貴族院議員、後に逓信大臣、台湾総督）の日記中に記されている。

（大正十三年）十二月十三日 晴寒益加 日曜日

（中略）

午後松方氏来り囲碁す。

此の日、安場末喜男次女富美子、後藤男夫妻の媒酌を以て清野勇氏長男謙次氏と結婚式を行ひ、後六時築地精養軒に於て披露宴を開く。予は安、篤の二人と招きに応じて之れに赴き、卓上予は来賓に代り祝辞を述べ。宴後小三落語を

聴き、九時過ぎ散じて帰る。

此の夕静座会。宴会の故を以て之れに不参。

十二月十四日 晴寒

午後松方氏来り囲碁す。

四時安場邸を訪ひ、夫人に面し昨夕の招宴を謝す。

又清野氏を六本木町福嶋邸に訪ふ。不在、乃ち昨夕招宴の謝意を述べて去る。

（中略）

十二月十五日 晴寒

山之内一次氏、客英国より帰り、今午前来訪。談は欧州戦争及び時局趨勢に及び、閑話数刻、後一時過辞去。

菅田政次郎氏来訪。

午後五時安場男の招きに依り、清野新夫婦里帰りの宴に赴く。新夫婦及び家族の外、清野勇氏、後藤男夫妻、赤星鉄馬氏夫妻、福島夫人、富永氏夫妻之れに列す。談笑湧くが如く。後九時過ぎ散じて帰る。」

補注

①②③「医文学」第17号（清野勇先生の逝去）より意識）

④神戸大経済経営研「新聞記事文庫」京大展望 来間恭

⑤「近畿医家列伝」「岳陽名士伝」

⑥「随筆遺稿」および昭和13年9月11日付朝日新聞の公判記事から推定。

⑦「安場保和伝一豪傑・無私の政治家」安場保吉編

【寄稿】

大聖人様の聖跡を尋ねて（安房へ）

槻木地区 井元恵子

佐渡に続き、井上真理さんと柏原ナツ子さんの三人で、千葉県へ行つてまいりました。私事です。が十月より仕事に復帰が決まり、平日に行くのが格安で行けるため九月中に行きたいと私のわがままをお二人が聞いてくださって佐渡行きから一か月も経たないうちに連れていっていただくことになりました。今回は二泊三日の三人旅です。

【一日目】

天気予報を見ると台風十二号が近づいており、飛行機が飛ばかギリギリまで心配しました。何とか飛行機も定刻通り飛ぶということで、飛行機を使い関空から成田へ。台風のせいかな何度も揺れましたが無事九時に成田へ到着。

レンタカーを借りて高速で内房の保田方面へ。最初の目的地は、南房総市富浦にある妙福寺です。妙福寺には井上さん

が前もって電話してくださり、お彼岸で忙しいが午前中なら来ていただいても大丈夫とのこと、何とか十一時半ごろに妙福寺に到着。

妙福寺は、大聖人さまが建長五年に立宗された後、鎌倉布教へ向かわれる際に富浦の港から船出しようとしたところ、嵐のために渡れず三日間足止めされたため、泉沢権頭太郎の家に逗留されたのですが、その際にその家のお福さんという老母が、大聖人さまの袈裟衣を洗ったとされる、『日蓮聖人衣洗い井戸』が今に伝えられています。その井戸は、周りが長い年月で地盤沈下し、今では地盤と井戸の高さが同じになっています。

老母が洗濯している間、大聖人さまは代わりの衣がないため、裸体のまま読経されたそうで、その時の御姿といわれる御影像が本堂に安置されていました。御

影像は、裸体の像であるため、袈裟衣を着せてご安置されていました。

その際、お福さんという老母と弟の次郎と三郎が教化をたまわり、お別れの時に妙福の法号をいただき、後にお福さんと弟が身延へ訪ねていった時に、裸の祖师像と御本尊を賜り、それらを安置するために妙福寺を建てたと聞きました。

安房へ来られた時には何度も立ち寄られ、鎌倉へ船でお渡りのときに、名のある港は使えず、ひっそりとした浜辺から船にのるために、妙福寺の近くの港から鎌倉へ何度も渡ったと聞きました。裏山の一番上にお福さんのお墓があり、三人で題目三唱をさせていただきました。

妙福寺の若い住職がとても親切で、お御影・井戸・お墓と雨の降る中、案内してくれました。感謝です。

妙福寺の住職曰く、雨は縁起がいいところで、雨でなかったら大聖人さまはここに立ち寄ることもなかったからだ。妙福寺のお会式などお祝い事の時は、いつも雨が降っているそうです。

お昼には、井上さんお勧めの漁協直営食堂の「ばんや」の本店にて、お目当ての金目鯛の煮付けをいただきました。と

でもとても美味しかったです。車を走らせているとどこも金目鯛の煮付けの幟がありました。機会がありましたら是非とも食べてみてください。

保田妙本寺に行くのと台風のため、今日はあけてないとのこと。後日出直すことにして、南房総市から鴨川市に向かいました。その鴨川市に向かう道は、長狭街道といい、大聖人さまがよく歩かれた道で、今でこそ車が対抗で行きかう道ですが、当時は馬が一頭通るくらいの狭い道だったのではないかと想像します。その長狭街道沿いにも、大聖人さまゆかりの史跡がいくつかあります。

まずは蓮華寺。この地方は当時東条（地頭は東条景信）と西条に分かれており、蓮華寺は西条という東条景信の支配の及ばない領地にあり、大聖人さまは蓮華寺のあった所を拠点として布教活動をされていた、と蓮華寺のご年配の女性から聞きました。

蓮華寺から少し下りて行くと、小松原法難で受けられた額の刀疵を洗った疵洗いの井戸があります。疵洗いの井戸は沢山あって、現存しているのは三つになっているそうです。



「日蓮聖人御疵洗之井戸」（左）と、東条と西条の境にある「境橋」

その「日蓮聖人御疵洗之井戸」から東に向かうと、少し先には待崎川に掛かっている橋が「境橋」です。この川を境に東条景信の支配下の東条と西条が分かれる境目だった橋です。大聖人さまの故郷は東条側にあり、この橋を命懸けでお渡りになったことでしょう。

夕方近くなり、菅野ご住職が源立寺に來られる以前に住職をされました蓮生寺へ。

蓮生寺のご住職とご一緒に夕方の勤行をさせていただき、帰り際には麻綿原に行くなら案内しますよ、と。事前に菅野ご住職が一報を入れて下さっていましたので快く言って下さいました。

麻綿原というのは、立宗宣言の折に題目を唱えられたのが旭が森ではなく、実は麻綿原ではないかといわれている場所です。

この日私たちの泊まる宿は、大聖人さまが十二才の頃に、道善房師の元に出家得度されたお寺、清澄寺です。

私が、旭が森で日の出とともにお題目を唱えたいと言いましたので、それで井上さんが手配してくれて、清澄寺に泊まることになりました。宿坊や研修センタ

ーなどがある建物です。普段は、精進料理などが出るみたいですが、今回は素泊まりです。

実は、お彼岸の最中であることやコロナ禍の影響で、最初は清澄寺には宿泊を断られたようでしたが、井上さんが何度も電話で交渉した際、そのやり取りで押しがきいたのか、折返し電話があつて、食事の用意はできませんがどうぞ、とのこと泊まることになりました。感謝です。

【二日目】

旭が森まで。台風で足元が悪く階段を割と登るので、柏原さんには宿坊でゆっくりしてもらい、井上さんと二人で旭が森まで散歩しました。

お寺の傘を借りて行きましたが、風が強く傘をさせる状態ではなく、霧雨の中で大聖人さまの像があるところまで行きましたが、霧と風と小雨で周りは何も見えず、題目三唱だけして部屋へ戻りました。途中には、大聖人さまが修行されたというお堂と、道善房師のお墓がありました。

宿を後にして次は日蓮寺へ。日蓮寺の駐車場に車を止めてそこから見上げると、

一〇〇段以上もあるのではないかと思うくらいの階段があり、途中には疵洗いの井戸と疵の手当てをされたという場所がありました。「養疵窟おいわや」といわれるその岩屋の岩砂にヨードが含まれており、法難で受けられた疵口がみるみる塞がったと言われております。大聖人さまの額の刀疵を、お市さんが綿帽子で血止めの手当てをしたという言い伝えがあります。

とにかく階段をひたすら登り切ると本堂があり、そこはご住職の奥さんがいらつしやいました。とても日本語の上手なフイリピンの方でした。

そして誕生寺へ。昔々は大聖人さまのお生まれになった小湊片海に近いところにあつたそうですが、一四九六年・一七〇三年の二度の大地震・大津波に遭い、今そこは海の中になつてしまいましたので、現在の場所に移したとのこと。立派なお寺でした。大聖人さまの幼少の善日磨磨の大きな像があります。

蓮華が淵へ。誕生寺の近くに大聖人さまのお生まれになったところ（小湊片海）があり、そこへ行こうとしましたが通行止め。ではということ、近くの鯛の浦遊覧船に乗って蓮華が淵を見ようと

思いましたが、台風の波ではなく強風の為に欠航。残念。最終日の明日にかけてみることに。

妙蓮寺へ。大聖人さまのご両親のお墓があるということでしたが、お位牌しかわからず。井上さんが森秀之さんに電話して聞いてくれ、もっと奥に行かないとアカンらしく。また今度に。

次に鏡忍寺へ。小松原法難の地です。境内には樹齢千年以上の『降神の榎』があります。

大聖人さまが、東条景信から一太刀目に額を切られ、二太刀目を切ろうと刀を振り上げた時、大聖人さまが一喝しました。この時に、背後の榎の樹に鬼子母神が現れ光を放つと、東条景信は驚愕し目がくらんで落馬して気絶しました。そのときの、樹齢千年以上の『降神の榎』がです。それは見事な榎の樹でした。

殉死した工藤吉隆公が、その時妊娠中の妻に男子が生まれたら弟子にして欲しい、と遺言したそうで、鏡忍寺はその工藤吉隆公の子が大聖人さまに弟子入りして日隆上人となり、大聖人さまが殉死した工藤吉隆公と弟子の鏡忍房の二人の菩提を弔うために、日隆上人に開創の命を

下されたのが始まりとされています。
上人塚へ。工藤吉隆公と鏡忍房のお墓があります。墓印とされた松がありました。上人塚は狭い長狭街道の通りにあり、車を止めるところもないので、何とかギリギリに車を止め、急いでお二人のお墓に題目三唱。

多聞寺へ。大聖人さまが小湊へ向かうときに、美しき童子に姿を変えた毘沙門天が、大聖人さまをお迎えに現れたとされる伝承ですが、この話を聞いて、初めて私は多聞天と毘沙門天が一緒だと知りました。またまた出ました私の無知……。でも、少しづつ色んなことを知ることが出来て楽しいです。皆さんに教えていただき感謝です。

この多聞寺には、大聖人様をお守りした北浦忠吾・忠内兄弟のお墓があったみたいですが、気づかず残念。

日澄寺へ。工藤吉隆公の屋敷跡です。大聖人さまは法難の後、この工藤吉隆公の屋敷で、北浦忠吾と忠内に護られ手当てを受けられたとあります。

鏡忍寺から日澄寺まで、東へ六キロあります。日澄寺から綿帽子のお市さんの日蓮寺までは、また東へ五キロ強あります。

す。東条景信の手から逃れるには西条まで逃げないといけないのですが、思うに任せず手当てを受けながら転々とされたことが窺えます。大切な弟子・鏡忍房と大切な檀越・工藤吉隆公を失い、ご自身も大けがをされた大聖人のご心痛はいかばかりだったでしょうか。凡夫の私にははかり知れません。

夕方前に養老溪谷へ。小雨が降っていたので、先ずは温泉へ。ここの温泉は真っ黒でつるつるの、いいお湯でした。その後滝へ。と思いましたが暗くなり雨も止まず諦めて宿坊へ。

【三日目】

麻綿原へ。蓮生寺のご住職が同行・案内してくださることでしたので、十時に蓮生寺にお迎えにあがり、清澄寺経由で向かうことに。近道はあるみたいですが、麻綿原近くにお住まいの信者さんに、あらかじめご住職が通れるか聞いてくださって、その日は台風の影響で通れないとのことでしたので、清澄寺経由で行くことになりました。途中から舗装してない山道になり、車一台が通れるくらい道でした。

その山道を進んで行くと、崖崩れで石

が沢山落ちていて通れなくなっていました。バックして引き返すことも出来ず、ご住職（鹿児島常道さま）にも手伝っていただき、みんなで落石をどけて、やっと通れるようになりました。

麻綿原は、険しくヒルが必ず出ると聞いていたので、長ズボンを履き準備していましたが、舗装されてキレイになっていて、ヒルの心配もなく登れました。先にも書きましたが、立宗宣言はここでされたと思う、と事前に菅野ご住職に伺っていましたので、どんなところだろう



麻綿原：天拝園へ

と思ひながら登りました。

上ると、そこには大聖人さまの像が安置されているお堂がありました。周りを見てみると曇っていました、とても見晴らしのいい景色で、『ここだ!!』と思いました。旭が森と比べると全く違う景色です。日の出をここから見ると、それは壮観で清々しいのではないかと想像できます。ただ日の出を見るためここまで大聖人さまが来られたのなら、あの険しいヒルが出る真つ暗な道を上つて来られたのか―すごいなあ―と、私たちは車で来たので。鎌倉時代には普通の事でも現代に生きる私にはなかなか難しいことです。

鯛ノ浦遊覧船が、その日は運航していましたので、柏原さんと二人で乗りました。井上さんは前にも乗る機会があったので、私たちが乗っている間にもう一度行きたいということで、先にご両親のお墓のある妙蓮寺へ行かれました。

柏原さんと二人で船に揺られながら、蓮華が淵の方を見ると、崖の下でそんなに広くないという印象でした。大聖人は、ここでお生まれになり、湾内にたくさんのお鯛が群らがって浮上し、波間に銀

鱗を躍らせ祝ったという光景は、なかなか想像出来ませんでした。人は経験したことのないものを想像するのは容易なことではないのだと思いました。



鯛ノ浦遊覧船に乗船：船窓上に「日蓮大聖人ご降誕800年」の文字が

鯛は深海性の回遊魚で、太平洋の荒波に面した水深わずか十〜二十メートル前後の場所に定住していることは、他に例がなく学会の謎とされているそうです。

鯛ノ浦の鯛は、特別天然記念物と指定され釣ることは禁止されています。

私たちは、残念ながらその日の鯛は機嫌が悪く、見ることは叶いませんでした。その代わり、ヒラマサの大群が見られました。

再び妙蓮寺へ。先に行っていた井上さんが、ご両親のお墓にお題目を唱えてきたと。その後、私たちを迎えに来てくれて、一緒に本堂に向かうと、住職が本堂内のお位牌の後ろの大きな扉を開けて下さり、その立派な祠の中のご両親のお墓を拝見することができました。

井上さんと柏原さんのお二人が、何度も『感動する!! 来てよかった!!』と言っていたのが印象的でした。

保田妙本寺へ。一三三八年より続く歴史ある日興門流のお寺です。お若いご僧侶に昨年の台風被害についてお話を伺いました。

「毎年、台風が来るからと対策だけは怠らずにしていますが、いつもは大したこともなく通り過ぎていましたので、昨年と同じだろうと思っていたところ、いつもと様子が違って風の音も大きくて、朝起きて見てみると客殿の

上がり口の様子がおかしい……。何か黒く見える……。ということと近づいて行くと、大きな五段の階段が手前に傾いて、床下が丸見えになっていました。こんなことが起こるなんてと思いながら周りを見ると、大灯籠（高さ二メートルはある大きな灯籠）が周りに一つずつ落ちていて、まるでだるま落としをした様でした。その他にも、元は学校だった百畳ある畳敷の宿坊の畳が、手で掴んで持つとボロボロになるような状態で、気温が高かったことから、白いキノコみたいなカビが二・三日で生えてきてびっくりしました。御本尊を奉納している宝物殿と本堂は奇跡的に無事でした。良かったです」

と、話は尽きず、昨年の台風の被害が余程凄かったことが想像できました。

何より大聖人さま御真筆の御本尊さまが無事で良かったと思いました。その後、本堂で題目三唱させていただき、妙本寺をあとにしました。

時間がありましたので、鋸山へ向かいましたが、スカイラインは濃霧のため通行が終わったところでした。帰りの飛行機まで一時間ほど余裕がありましたが、取りあえ

ず高速にのり、時間があれば途中のアウトレットでも寄ろうかと話していました。

ところが、一時間ほど走ると急に渋滞で車が進みません。事故渋滞のようでしたが、まあ時間も余裕だから大丈夫かなとか何とか話しながら少しづつ進んでいましたが、どんどん止まる時間が長くなり、そのうち飛行機に乗れるか怪しくなってきました。間に合わなかったら新幹線？、どこかに泊まる？、などと話したり、知り合いに電話してみたり、どうなるか心配でしたがなんとか間に合い、やつとの思いで無事帰路につききました。

佐渡の時も思いましたが、実際に大聖人さまのいらつしやった場所を訪れると、その時の情景が想像でき、大聖人さまのお傍に居られるかのように感じます。お生まれになった場所、立宗宣言の麻綿原。小松原法難の地とその後転々と移動された距離感などが、体感出来たことが本当に良かったと思いました。

『孝と申すは高なり、天高けれども孝よりも高からず。又孝とは厚なり、地あつくれども孝よりは厚からず。聖賢の二類は孝の家よりいでたり。何に況や仏法を

学せん人、知恩報恩なかるべしや。仏弟子は必ず四恩をしつて知恩報恩をいたすべし。』（開目抄）

私はこの機会に『孝』は恩と知りました。四恩も父母の恩・一切衆生の恩・国王の恩・三宝の恩と知りました。

恩は、天が高いといっても恩の徳の高さに及ばないし、大地が厚くても恩の徳の厚さには叶わないという、この御書の意味がやっとわかりました。

人は知らず知らずのうちに色々なところで恩恵を受け、やつとのことで生きているということを改めて感じました。

この機会に、もう一度沢山の恩に報いるために、これから正しく生きていこうと思いました。

今回も、色々な方にお世話になり、有意義な時間を過ごせました。とても一人では行けなかったと思います。菅野ご住職には、詳しい大きな地図を印刷してもらい、場所の特定と解説もしていただきました。私のわがままに付き合っていたいただいた、井上さんと柏原さんに本当に感謝しています。

沢山の方々のお世話になりました。本当にありがとうございます。

恵日だより

秋季彼岸会法要

九月二十〇・二十一日



秋季彼岸会：三密を避けて地区ごとに奉修しました

九月に入っても、コロナ禍の先行きが見通せない中、今年の秋季彼岸会は、盂蘭盆会に引き続いて、三つの密を回避するため、地区ごとに奉修することとなり、二十日（兵庫）・二十一日（北摂・大阪）・二十二日（槻木・豊能）の三箇日に分けて奉修されました。このうち秋のお彼岸の中日に当たる二十二日（日）の槻木地区の彼岸会では、午前十時半、出仕鈴が打ち鳴らされる中、ご住職が出仕され、ご住職の導師により献膳、読経と如法に進められ、寿量品に入ってご住職のご焼香が行われると、引き続き参詣者が順に焼香台へと進んで全員がお焼香をし、ご住職により懇ろにご廻向がなされ、お題目三唱の後、ご住職より挨拶があり、法要は終了しました。

【恵日俳壇】

雨戸閉ず一枚ごとの冬の月
置き去りの鍬を濡らして初時雨

〔農婦〕

菩提寺の御会式さくら咲きにけり
立正安国申状奉読御命講
我が信の至らさ感ずお会式や
お会式や本堂に響けりお題目

〔森秀之〕

同様に午後一時からは豊能地区の彼岸会が奉修されました。また二十・二十一の各日も、地区ごとにそれぞれ法要が奉修されました。

ご案内・お知らせ

* 目師会のご案内

十一月十五日（日）午後一時より、目師会が奉修されます。

日目上人は、生涯をとおして大聖人、日興上人の教えを承け継ぐために、自らの身命を捧げられました。このような不自惜身

命の尊いご精神を拝し、ご報恩申し上げます。
のが「目師会」です。

***七五三祝い詣りのご案内**

宗祖日蓮大聖人御大会式のご案内

本年度の宗祖日蓮大聖人御大会式は、左記の日程にて源立寺本堂において執り行います。檀信徒各位には、参詣くださいますようご案内いたします。

なお、本年のお会式は、コロナ禍に対応して、**正当会・お逮夜とも参詣者数を、各七十名に制限**いたしました。が、正当会の参詣は定員に達しましたので、参詣を希望される方は、お逮夜にご参詣下さいますようお願いいたします。

※当日は、マスク着用・手指消毒で感染予防をお願いします。
また、参詣前に必ず体温測定し、三七・五度以上ある場合は、参詣をご遠慮下さい。

記

十一月七日(土) 午後六時 御逮夜法要

講演 興風談所 渡邊信朝師

八日(日) 午後二時 御正当会法要

講演 伝正院 坂口麗道師

十一月十五日(日) 午前十一時より、七五三祝いのお詣りを奉修いたします。

七五三のお詣りを予定されている方は、お寺まで電話にてご連絡をお願いします。
なお、十五日(日)に都合のつかない方は、ご希望の日時を源立寺までお知らせ下さい。

***各種行事の参詣について**

各種行事は、行事予定表の通り行いますが、参詣の際には、マスク着用や手洗い・手指の消毒等、感染予防に努めて下さい。

また参詣前に必ず体温測定し、三七・五度以上ある場合は、参詣をご遠慮下さい。
※源立寺本堂の玄関・トイレ前等にアルコール消毒液が置いてありますので、参詣の際はご利用下さい。

***南近畿教区研修会中止のご案内**

十一月二十九日(日)に、阿倍野区・聖道寺において開催を予定していました、第二十一回南近畿法華講研修会は、新型コロナウイルス感染症流行の現状に配慮して中止となりました。



十一月の行事



一日 (日) 午前九時 講中勤行会

午前九時半 大掃除・お花作り

午後五時 お経日

七日 (土) 午後六時 御大会式御逮夜

八日 (日) 午後二時 御大会式御正当会

十三日 (金) 午後一時 お講

十五日 (日) 午前十一時 七五三祝い

午後一時 目師会

※十二月号の継命・恵日発送は、

『豊能』地区が担当です。

一月号の継命・恵日発送は、

『兵庫』地区が担当です。

【霜月詠草】

小春日に 夫と歩む 松林

〔和風〕

ゆったり気分の 天の橋立

秋ざくら 背にして写す 十八名

同胞の中に 亡き母も居て



「怠るな 忘るな泣くな な乱れそ」と

遺書巻頭の歌 この身を支ふ

半世紀 経るとも戦時 よみがへる

真実こもる 遺書に對へば

恵日

令和二年十一月号 通巻三一〇号
令和二年十一月一日発行

編集兼
発行人

菅野 憲道

恵日編集室

〒563-0057 池田市槻木町一〇 源立寺内

TEL (〇七二) 七五一一三三三

E-Mail kanno@wombat.zaq.ne.jp

購読料(含送料) 年間二〇〇〇円

加入者名 恵日編集室会計

〒振替 口座番号 0138012112649